

# 授業の“まとめ”の指導を考える

授業の“まとめ”について、沖縄県教育委員会の「「確かな学力の向上」支援プラン改訂版 わかる授業 Support Guide」でも、重要視されています。また、学習者の考え方、見方、学習力などを鍛え、授業のめあての達成、学習者の理解できたよこびを実感させる学習の場でもあります。

## 1 授業の“まとめ”の指導について

### (1) 共通概念のもとで実践を！

学校として「めあて」と「まとめ」の用語の捉え方や指導方法について、学校や学年全体で共通の概念のもとで実践する必要があります。指導方法としては、授業の「めあて」と「まとめ」は一対であるため、たとえば「めあて」としての「(〇〇が) わかる、できる、考えることができる」などの評価規準に対して、「まとめ」では、それぞれがどのようになればよいかを明確にするなどの徹底が大切です。

このように学習内容によって、**評価基準と評価方法**を各授業ではもちろん、単元全体および家庭学習等も配慮し、決めておく必要があります。

### (2) 個を見取り、授業改善へ！

「まとめ」の場面での学習活動としては、「適応問題を解く」、「わかったことをノートにまとめる」、「クラス全体で本時の学習内容を話し合ってまとめる」などがあります。これらの活動を通して、教師は児童の“個の状態”を見取り、次の指導改善へと繋げる必要があります。また、“見取り”の結果から、個に応じた「補習」や学習プリント（学習材）等を用いた「家庭学習」の提供も大切です。

### (3) 言語活動の充実を！

「説明」や「振り返り」の場面では、「**事実・事柄の説明**」、「**方法の説明**」、「**理由の説明**」を意識した言語活動を充実させる必要があります。こうした活動を通して、学びの内容について、互いに考え、見方を鍛え、より深めた上で、次への発展（転移）ができるように指導したいものです。

授業の“まとめ”は、単元の目標、ねらいに位置づけられた本時の「ねらい」を達成し、一人ひとりが次への発展（深みのある転移）ができることが重要です。

岐阜女子大学 教育実践資料 No.4 (2015年)

岐阜女子大学 (岐阜県岐阜市太郎丸 80)

岐阜女子大学 沖縄サテライト校 (沖縄県那覇市国場 405)

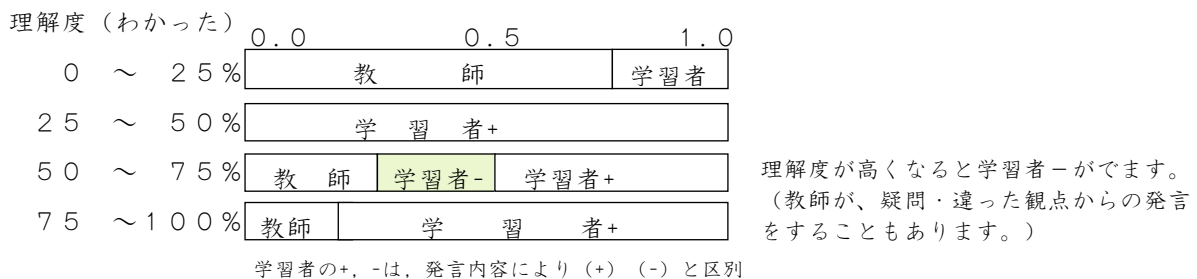
## “まとめ”の話し合いの教師と学習者の発言の特性

話し合いの場面での「教師」と「児童」(学習者)の発言を多くの授業で調べてみると、児童の半数以上の者がわかりだすと、そこから本時の学習内容に対し“疑問”や“違った観点からの発言”が出てくることが多いようです。

児童は、半数以下の者しかわかっていない時には、反対意見や疑問、違った観点からの発言はあまりしません。しかし、半数以上の者がわかりだすと、「〇〇の場合はどうなりますか?」、「このようなこともあるのでは?」、「私は〇〇と考えます。どうですか(違った観点から)?」などの発言が出てきます。教師は、この“疑問”や“違った観点からの発言”を上手に取り上げ、児童により深みのある考え方、見方をさせ、確かな力をつけさせたいものです。

児童からこのような発言が出ないときは、教師は考え方の深みを持たせたり、疑問を持たせたりするような質問をすることもあります。

このような教師と児童の発言について、児童の理解度の割合(%)と発言の特徴を調べてみると、次のようになりました。



理解度の%は、学習者のうち、約何%がわかっているかを示しています。(児童の表情で判定。)ここでの「学習者+」と「学習者-」は次の通りです。

「学習者+」 … 他の学習者の理解を促す、課題の解決につながる発言

「学習者-」 … 他の学習者がわからなくなる(混乱する)発言(疑問、違った観点などの発言)

(注) 学習者-が無いときは、教師がより確かな力をつけるため、疑問点や違った観点から質問することも大切です。(ベテランの教師は、このような発言が学習者から出るように指導されている場合が多いようです。)

現在は、アナライザーを使わなくても、ビデオカメラで授業の映像を後から見ることができます。ビデオ映像記録等を利用し、学習者の発言や表情の様子から授業振り返りして下さい。

### ◇ “まとめ”の所要時間

“まとめ”の所要時間を調べたところ、Q<sub>1</sub>(1/4)が4分、Q<sub>2</sub>(2/4)が6分、Q<sub>3</sub>(3/4)が8分でした。

このことから“まとめ”の所要時間は、調査した授業における半数が4分~8分間だということがわかりました。

所要時間	Q <sub>1</sub>	Q <sub>2</sub>	Q <sub>3</sub>
まとめ	4分	6分	8分

ぜひ“まとめ”の指導方法についての研究の参考にして下さい。

### 3 “まとめ”の資料例の説明

“まとめ”の指導について、1968年頃の事例を紹介します。

ここで紹介する先生は、大学卒業後に採用、出身校（小学校）に配属されて3年目の先生です。採用された年の2学期から、毎日自分の授業をテープレコーダーで録音し、自宅で授業の音声（授業における教師と児童のやりとり）をノートに書いていました。その後は、今のようにビデオカメラの無い時代でしたので、教室の角の天井の下にフィルムカメラを設置し、授業を撮影、それを授業記録として使っていました。

しばらくすると、岐阜大学がアナライザーを提供し、児童の学習反応を調べる研究へと発展していきます。アナライザーによる分析では、児童が手元のキーパッドを操作し、わかったときは「SW3」、わからなければ「SW1」を押させ、わかったと押した児童の数をテープレコーダーの音声と合わせて記録しました。これにより、「いつ」、「どのような発言・指導」が児童の理解度（わかった）と関係しているのかを知ることができました。

### 4 “まとめ”の実践例の紹介

“まとめ”の場面のペンレコーダーと音声記録とを合わせた記録です。グラフ（集団反応曲線）は、クラスのわかった児童の人数を示しています。わかった児童数が多くなれば、グラフは右上がります。

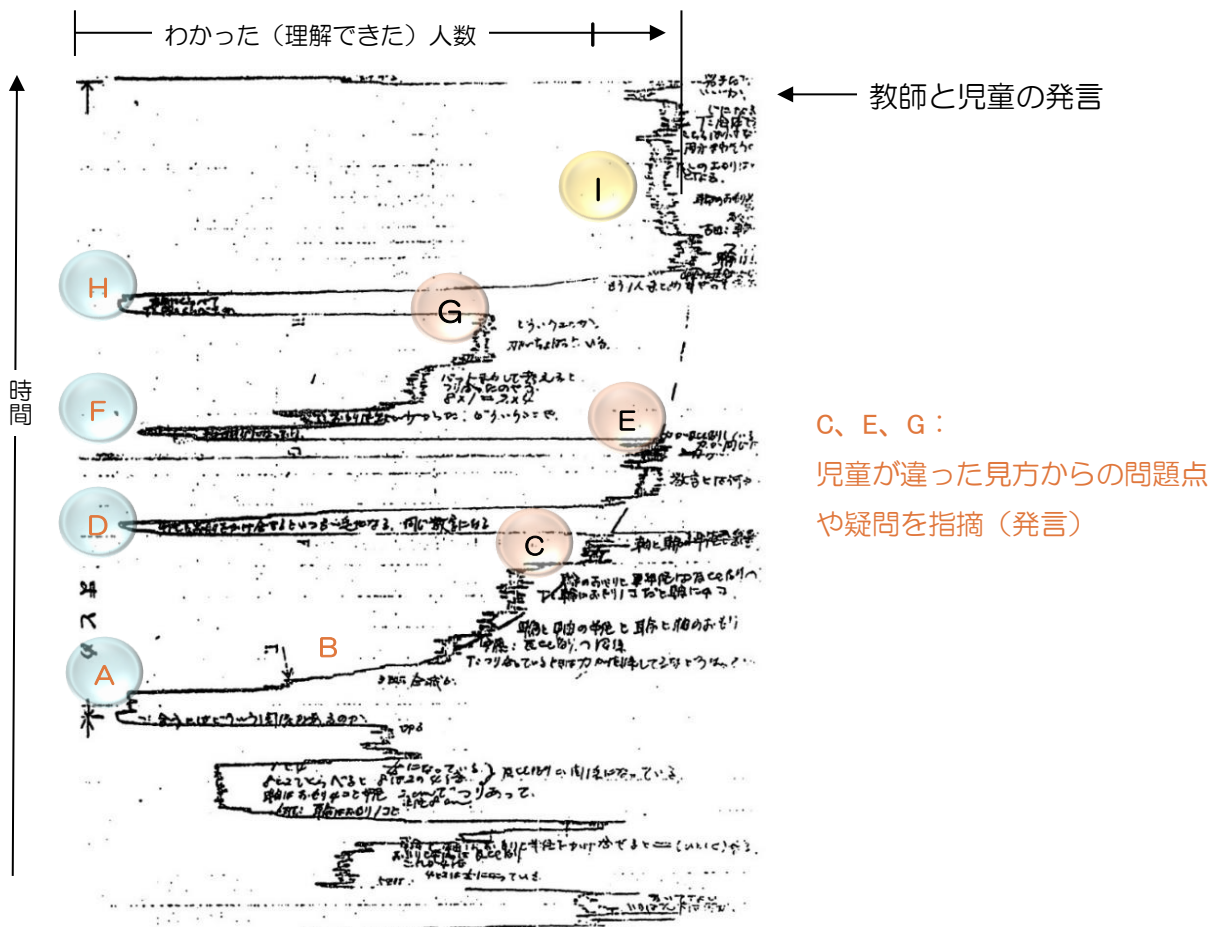


図1. 理科（5年生）の授業のまとめの場面（授業者：岩田晃先生）

時間を追ってみてみましょう。授業の“まとめ”は最初のAから始まっています。

**A** : 教師「〇〇〇について、どのような関係がありますか。」と発問。  
約50%の児童がわかったと反応して（反応曲線が右へ上がって）います。  
Bでは、教師が簡単なコメントをしています。その後、教師（T）と児童の話し合いが続き、さらに理解度が上がります。（反応曲線は右へ上がっています。）

**C** : 児童が疑問を出すと、多くの児童がわからなくなります。（反応曲線が下がっています。）  
…このような児童からの疑問・質問が出ることで考えを深めるのに重要です。

**D** : そこで先生は、説明できると判断した児童を指名し、発表させています。児童が発表・説明をすると、前（C）よりわかる児童の数が多くなります。  
…このような説明ができる児童の指名が重要です。（学習者の理解）

**E** : 児童が違った観点（見方）からの疑問を出しました。そうすると、また、多くの児童がわからなくなります。（反応曲線が下がっています。）

**F** : 先生が指名した児童が説明すると、児童の約半数がわかりました。さらに話を続け、少しずつわかる児童が増えていきます。

**G** : そこで、先生が新たな課題を解決するための問題点について問いかけると、また反応曲線が下がります。（わからなくなります。）  
…しかし、その質問が考え方のヒントになっています。

**H** : 先生が指名した児童がさらに説明すると、ほとんどの児童が理解していきます。

**I** : ほぼ全員がわかりました。その後、先生と児童との話し合いで本時の学習内容のまとめをしています。

本授業の“まとめ”では、本時で学んだ学習内容について、いろいろな観点から話し合い、考えを深め、最後に全員がわかる授業がされています。

「鉄は熱いうちに打て」というように、“まとめ”で確かな力をつけるための努力がされています。

児童が、単に「わかる、理解できる」だけでなく、さらに他の課題解決に“まとめ”で得られた考え方、技能を転移（短期、長期）する力も育てたいものです。

## 5

### “まとめ”で大切な指名

事例のように、質問、疑問に対する児童による説明がされる場合は、教師は、誰を指名するかが重要です。…説明によってさらにわからなくなってしまうのは困ります。